

# 社会科（地理的分野）学習指導案

展開学級 2 学年

## 1 単元名

- C 日本の様々な地域 (3) 日本の諸地域 ⑤その他の事象を中核とした考察の仕方  
「東北地方～困難を乗り越える人々の営みからよりよい未来を考える～」

## 2 単元について

### (1) 単元観

本単元は、中学校学習指導要領の地理的分野(2)内容 C 日本の様々な地域(3)日本の諸地域を取り扱う。空間的相互依存作用や地域などに着目して、課題を追究したり解決したりする活動を通して、地域における地理的な課題について、地域の結び付きや地域の変容、持続可能性などに着目して、多面的・多角的に考察し表現することをねらいとしている。

東北地方では青森ねぶた祭など、長い間継承されてきた祭が開催されている。これらの祭は厳しい東北地方の自然環境において農作物の豊作などを祈るものであり、人々が協働して現在まで継承してきたものである。東日本大震災では甚大な被害を受け、今もお復興に向けた人々の営みが行われている。そこで、困難を乗り越える人々の営みを中核となる事象として東北地方を捉えていきたい。

東北地方は、日本の本州北東部に位置し、その自然環境と社会環境は、地域に暮らす人々の営みに影響を与えてきた。東北地方の自然環境は、中央に南北に連なる奥羽山脈がそびえ、太平洋側と日本海側で異なる気候特性をもっている。太平洋側は夏に、冷たい北東風である「やませ」の影響を受けて農作物に冷害をもたらすことがあるが、冬は比較的晴れる日が多い。一方、日本海側は冬にシベリアからの季節風が日本海で湿気を含み、大量の降雪が見られる世界有数の豪雪地帯である。世界自然遺産に登録された白神山地に代表されるように、ブナ林をはじめとする豊かな森林資源に恵まれている。しかし、一方で、地震や津波といった自然災害の被害を繰り返し受けてきた地域であり、人々は自然の恵みと脅威の両方を享受して生活を営んできた。

東北地方の社会環境は、豊かな自然の恵みを受けながらも、その厳しい側面とも共存してきた。古くから農業、特に稲作が盛んである。耕地の区画整理や水路の整備を行うだけでなく、冷涼な気候に適した品種改良も行われた。庄内平野は東北地方における代表的な稲作地帯である。また、海岸部では漁業が発達し、新鮮な海の幸を提供している。リアス海岸は穏やかな海であることから養殖漁業が盛んである。しかし、近年では、若年層の都市部への流出に伴う少子高齢化とそれに伴う人口減少が急速に進んでおり、第一次産業の担い手不足、地域経済の活性化、さらには集落の維持といった課題に直面している。このような状況下で、東北地方の人々は、自然と共に生きる知恵と、地域コミュニティにおける互いに支え合う精神をもって、持続可能な地域社会の実現に向けた新たな営みを模索し続けている。

2011年3月11日、東北地方太平洋沖で発生したマグニチュード9.0の巨大地震とそれに伴う大津波は、「東日本大震災」として未曾有の被害をもたらした。この震災では、死者1万5,900人、行方不明者2,520人(2025年3月時点、警察庁発表)という甚大な人的被害が生じた。地震による激しい揺れに加え、遡上高で40mを超える地点も観測した津波は、沿岸の市街地を広範囲にわたり壊滅させ、多くの

尊い命と暮らしが失われた。特に福島第一原子力発電所の事故は、広範囲にわたる避難と長期的な環境汚染の問題を引き起こし、人々の生活と地域経済に甚大な影響を与えた。

東日本大震災から10年以上が経過し、インフラの復旧や集落の高台移転など、物理的な復興は大きく進んだ。特に、海岸線に沿って巨大な防潮堤が次々と建設され、再び津波の被害を受けないための対策が講じられた。しかし、この防潮堤建設は海との分断や景観の喪失といった問題点を伴い、一部地域では住民からの強い反対意見も上がった。他にも、集団移転した高台の団地で新たなコミュニティが形成されにくい、あるいは従来の集落が少子高齢化で存続の危機に瀕するといった問題がある。また、仮設住宅から災害公営住宅へ移った後も、以前の近所付き合いが薄れるなど孤立感を抱える人々も少なくない。震災からの復興は、単なる物理的な回復に留まらず、人々の生活再建、地域社会の再構築、そして未来への持続可能な発展を目指すものであり、震災から10年以上たった今もなお続く終わりのない道のりなのである。民間、行政、NPO、大学などが連携・協働し、多くの取組が行われている。これらの事例を復興庁が取りまとめ、平成27年に『新しい東北』事例集』として公表した。その後も先導的な取組を募集し、現在は『新しい東北』復興・創生の星頭彰』として表彰、公開している。例えば、宮城県仙台市にある「NPO 法人冒険あそび場 - せんだい・みやぎネットワーク」は、外で遊ぶ機会を失った子どもたちのために遊び道具を持って小学校や仮設住宅を巡回する活動を行っている。福島県いわき市にある「NPO 法人ザ・ピープル」は、オーガニック・コットンの栽培を通して原発事故による風評被害による農業の衰退からの再生や地域コミュニティの結びつきを強めようとする取組を行っている。これらの事例は、地域コミュニティの形成や産業の再生を通して、人口減少や少子高齢化などの現代日本が抱える課題をも乗り越えようとする営みである。東北地方は、現代日本が抱える課題を解決しようとするフロンティアであるといえる。

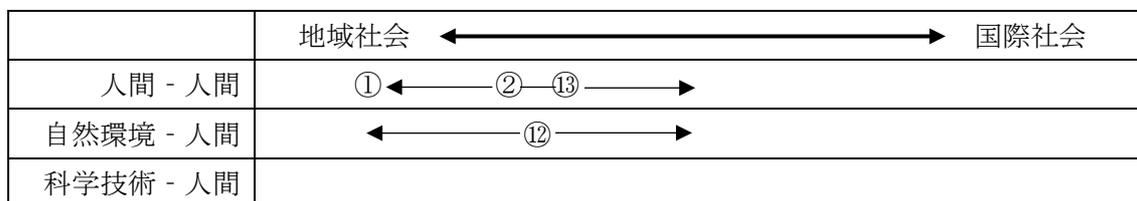
物理的な復興と並行して、東日本大震災で犠牲となった人々の鎮魂と、被災からの復興を願う祭として始まったのが、東北絆まつりである。この祭りは、2011年から2016年まで開催された「東北六魂祭」の後継イベントとして、2017年に仙台市で始まり、東北6県の県庁所在地が持ち回りで開催している。参加する東北6県の祭りは、青森県の青森ねぶた祭、秋田県の秋田竿燈まつり、岩手県の盛岡さんさ踊り、山形県の山形花笠まつり、宮城県の仙台七夕まつり、福島県の福島わらじまつりである。これらの祭りは元来、東北地方の厳しい自然環境を乗り越え、農作物の豊作を祈る意味が込められている。東北絆まつりは、東北各県の祭りを通じてさらなる復興とその先の未来に向けて前進すること、そして国内外へ東北の魅力を発信し、地域経済の活性化と交流人口の拡大を図ることを目的としている。メインイベントのパレードのほか、東北エリアの物産が楽しめるブースも設けられ、地域の魅力を発信している。また、2025年には大阪・関西万博で東北絆まつりパレードが披露され、東日本大震災時の支援への感謝、未来へ向かう東北の姿が発信された。

以上のことを踏まえ、単元を貫く問いを「東北地方の人々はどのように困難を乗り越えているのだろうか。」と設定する。東日本大震災からの復興に向き合う人々の営みから困難を乗り越えるための方策や考え方を捉えたい。

第1時では、東北絆まつりを題材に東北地方の自然や社会環境を大観し、厳しい自然環境のなかで人々の生活が営まれていることを理解する。第2時では、東日本大震災の甚大な被害実態や復興に伴う課題を捉え、単元を貫く問いを設定する。第3時では、東日本大震災からの復興において、東北地方の人々がどのような対応をしたか理解する。太平洋沿岸での防潮堤建設をめぐる事例と、仮設住宅での住

民が開催する食事会の事例を取扱う。第4時では、復興庁『新しい東北』事例集』を資料として、人と人とのつながりを生み出すためには、どのようなことが必要であるか考察し、スライドにまとめる。第5時では、作成したスライドを発表し、より良い未来の姿を考察する。共生社会を創造する主権者となる生徒が、より良い社会の在り方を考察し、それに向けて行動するきっかけとしたい。

(2) 主題との関連



本実践で扱う共生の範囲 ※丸囲み数字は共生社会に関する問題 岡本(2024)より

全体研究主題は、「共生社会の実現に向けて主体的に関わる生徒の育成」である。地理学は、日本地理学会編の地理学事典によると、「地球の表層で生じる自然現象や地表を舞台に展開する人間活動を対象にし、自然や人間との関わりを動的に捉えるとともに、その地域的特色を解き明かそうとする学問である。」と定義されている。地理的分野の学習では、「人間 - 人間」、「自然環境 - 人間」の關係に着目しながら地理的事象を追究することで、地域的特色を解き明かすことができるだろう。生徒がこれらの關係を学習することで、望ましい共生社会の在り方について理解したり、これからの共生社会の実現に向けて考えを深めたりすることにつながる。

東日本大震災からの復興に取り組む人々の営みは、共生社会を創造しようとする人々の営みが現れている。例えば、「人間 - 人間」の關係であれば第3時で扱う、防潮堤建設反対の市民運動、仮設住宅で住民が開く食事会があげられる。「自然環境 - 人間」の關係であれば第2時で扱う、津波被害から住民を守るために国が建設を進めた巨大な防潮堤、沿岸部集落の高台移転があげられる。

以上のことを受け、人間と自然環境の共生、個人と国家の共生、個人間の共生に着目して単元づくりを行う。生徒の事実に認識を整理するために「思考の構造図」を作成し、社会認識の深化を意識した単元づくりを行う。

(3) 副題との関連

全体研究副題は「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」である。令和5年6月に閣議決定された教育振興基本計画において、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実は共生社会の実現に向けて必要不可欠な教育施策であると述べられている。

本単元では学習の成果物として、東日本大震災からの復興に必要なことをスライドにまとめる。スライド作成にあたっては、人々のつながりを生み出すために必要なことを考える資料として、復興庁『新しい東北』事例集』を活用する。生徒の興味関心に応じて資料を選択することで個別最適な学びの観点からは、学習の個性化をはかることができる。協働的な学びの観点からは、スライドの発表会を行ったうえでスライド完成させる学習過程を構築する。グループに1台液晶モニターがあるため生徒の発表機会を保障することができる。他者の社会認識に触れることで生徒の思考が再構築され、多面的・多角的な視点を踏まえた思考ができるよう導きたい。単元全体を通して他者との意見交換の場を多く設定し、生徒がともに学び合う環境を構築したい。

(4) 生徒の実態 (2年B組 男子17名 女子17名 計34名)

令和7年7月1日にQ-Uアンケートを実施した。本学級の生徒は、「かたさのある学級集団」である



### 3 単元の目標

- 東北地方について、東日本大震災からの復興における人々が困難を乗り越える営みを理解する。  
[知識及び技能]
- 東北地方について、東日本大震災からの復興における人々が困難を乗り越える営みを、自律的で持続可能な地域社会づくりや人々の結び付きに着目して、多面的・多角的に考察し表現する。  
[思考力、判断力、表現力等]
- 東北地方について、共生社会の実現を視野に東日本大震災からの復興における人々が困難を乗り越える営みを主体的に追究しようとする態度を養う。  
[学びに向かう力、人間性等]

### 4 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
東北地方について、東日本大震災からの復興における人々が困難を乗り越える営みを理解している。	東北地方について、東日本大震災からの復興における人々が困難を乗り越える営みを、自律的で持続可能な地域社会づくりや人々の結び付きに着目して、多面的・多角的に考察し表現している。	東北地方について、共生社会の実現を視野に東日本大震災からの復興における人々が困難を乗り越える営みを主体的に追究しようとしている。

### 5 単元の指導計画（5時間扱い）

(○…「評定に用いる評価」 ●…「学習改善につなげる評価」)

時	主な学習活動	知	思	主	評価
	<p>【単元を貫く問い】 「東北地方の人々はどのように困難を乗り越えているのだろう。」</p>				
	<p>【ねらい】 東北絆まつりが開催されている理由を理解する。</p>				
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>東北地方のまつりは、厳しい自然環境を乗り越え、農作物の豊作を願うものであることを理解する。</li> <li>東日本大震災は、M9.0の強い揺れや10mを超える津波により、死者15,900人、浸水範囲面積は561km<sup>2</sup>といった甚大な被害をもたらしたことを資料から読み取る。</li> <li>東北絆まつりは、東日本大震災に対す</li> </ul>	●			<ul style="list-style-type: none"> <li>東北地方のまつりは、厳しい自然環境を乗り越え、農作物の豊作を願うものであることを理解している。 (ノート記述)</li> <li>東北絆まつりは、甚大な被害をもたらした東日本大震災に対する鎮魂の意味を持つことを理解している。</li> </ul>

	る鎮魂の意味を持つことを理解する。				(ノート記述)
	【ねらい】 東日本大震災からの復興に向け、行政がどのように対応したか理解する。				
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>東日本大震災後に復興の担い手が増えていること、従来からの人口減少・高齢化の課題があること、それらの課題が震災によって深刻化したことを捉える。</li> <li>東日本大震災からの復興を通して、人々がどのように困難を乗り越えているか予想する。</li> <li>津波被害を減らすために、東北沿岸に防潮堤を建設したこと、住民の高台移転を進めたことを復興庁HP「空から見る復興」から読み取る。</li> </ul>	●	●	●	<ul style="list-style-type: none"> <li>東日本大震災後に復興の担い手が増えていること、従来からの人口減少・高齢化の課題があることを捉えている。(ノート記述)</li> <li>東日本大震災からの復興を通して、人々がどのように困難を乗り越えているか予想している。(ノート記述)</li> <li>津波被害を減らすために、東北沿岸に防潮堤を建設したこと、住民の高台移転を進めたことを読み取っている。(ノート記述)</li> </ul>
	【ねらい】 東日本大震災からの復興に向け、地域住民がどのように対応したか理解する。				
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>雄勝町の雄勝地区を考える会の活動から防潮堤建設に対する住民の行動や願いを理解する。</li> <li>石巻市牡鹿地区の住民が開く食事会の活動から人々のつながりや生きがいを持つことの意味を考察する。</li> </ul>	●	●	●	<ul style="list-style-type: none"> <li>雄勝町の雄勝地区を考える会の活動から防潮堤建設に対する住民の行動や願いを理解している。(ノート記述)</li> <li>石巻市牡鹿地区の住民が開く食事会の活動から人々のつながりや生きがいを持つことの意味を考察している。(ノート記述)</li> </ul>
	【ねらい】 東日本大震災からの復興に向け、必要なものは何か考える。				
4 本時	<ul style="list-style-type: none"> <li>「新しい東北」事例集から、まちのにぎわいを取り戻すために、人々はどのような活動をしているか読み取る。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; width: fit-content; margin-left: 20px;">個別最適な学び</div>	○			<ul style="list-style-type: none"> <li>「新しい東北」事例集から、まちのにぎわいを取り戻すために、人々はどのような活動をしているか読み取っている。(ノート記述)</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>人々の結び付きを生み出すために必要なものは何か考察し、スライドにまとめる。</li> </ul>	●	<ul style="list-style-type: none"> <li>人々の結び付きを生み出すために必要なものは何か考察し、スライドにまとめている。(スライド)</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>各自でまとめたスライドをクラス内で相互に発表し合う。 協働的な学び</li> <li>スライドの発表で得た意見を踏まえ、復興に必要なものを考察し、まとめる。</li> <li>本単元の学習を振り返り、復興に向けた人々の営みを踏まえて東北地方の特色をまとめる。</li> <li>学習過程を振り返り、よりよい学び方を考える。</li> </ul>	●  ○	<ul style="list-style-type: none"> <li>スライドの発表で得た意見を踏まえ、復興に必要なものを考察し、まとめている。(スライド)</li> <li>本単元の学習を振り返り、復興に向けた人々の営みを踏まえて東北地方の特色をまとめている。(ノート記述)</li> <li>学習過程を振り返り、よりよい学び方を考えている。(振り返りシート)</li> </ul>

## 6 本時

### (1) 本時の目標

- 「新しい東北」事例集から、まちなにぎわいや人々の結び付きを取り戻すために、人々はどのような活動をしているか読み取る。【知識及び技能】
- 人々の結び付きを生み出すために必要なものは何か考察し、スライドにまとめる。

【思考力、判断力、表現力等】

### (2) 本時の展開

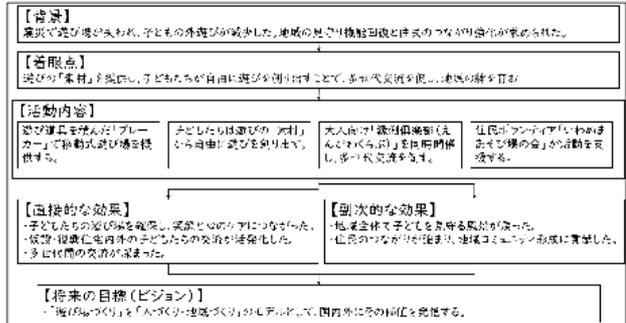
時配	学習内容と活動	留意点 (○) と評価 (◇)
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>○東日本大震災被災地の課題が現代日本の課題でもあることを確認する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>人口減少と高齢化</li> <li>持続可能な産業づくり</li> <li>東日本大震災からの復興は途中である。</li> </ul> </li> <li>○東日本大震災からの復興に向け、行われたことについて振り返る。 <ul style="list-style-type: none"> <li>沿岸部の防潮堤建設、集落の高台移転</li> <li>仮設住宅での食事会</li> </ul> </li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○復興庁『新しい東北』事例集(平成28年2月) P2～P3 からデータを提示し、地域課題を捉えさせる。</li> <li>○NHKが2025年に岩手・宮城・福島の18歳以上1,000人に行ったアンケートを提示する。</li> <li>○第3時で取り扱った事例から振り返らせる。</li> </ul>

<p>展開 10分</p>	<p>東日本大震災からの復興に必要なことは何だろう。</p>	
<p>30分</p>	<p>○復興に向けて東北地方で行われている取組を捉え、調べる事例を選択する。</p> <p>(探究する事業主体・事例)</p> <p>①「せんだい・みやぎネットワーク」 子どもの居場所づくり</p> <p>②「きっかけ食堂」 食を通して東北とのつながりづくり</p> <p>③「NPO 法人ザ・ピープル」 オーガニックコットン栽培で地域コミュニティの再構築</p> <p>④「一般社団法人まるオフィス」 地域課題探究で若者の人材育成</p> <p>⑤「日本栄養士会」 保育所を活用した、生活不活病の防止</p> <p>⑥「<sup>かつし</sup>甲子 柿を守る会」 柿を地域の名産品にする</p> <p>○選択した事例について調べ、スライド1枚にまとめる。 (スライドに載せる情報)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">個別最適な学び</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・探究した事例、事業主体</li> <li>・地域が抱えている課題</li> <li>・なぜ、その取組が行われたか。</li> <li>・復興につながることは何か。</li> </ul>	<p>○復興庁「『新しい東北』事例集」から編集した資料を6種類配信し、教室内にも掲示する。</p> <p>○すべての資料を見たうえで、調べる事例を選択させる。</p> <p><b>【本時の個別最適な学び】</b></p> <p>①～⑥から生徒の興味関心に合わせて選択させる。</p> <p>○個別最適な学びを促すための手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・大型ホワイトボードに資料を掲示し、生徒が気付いたことを書き込めるようにし、学習状況の可視化をはかる。</li> <li>・生徒が学習状況を自ら振り返る機会を与え、適切な学習方法を選択できるようにする。</li> <li>・生徒と授業者との対話を通して、資料読み取りやまとめの視点を持たせる。</li> </ul> <p>○生徒の興味関心に合わせて、複数の事例を調べさせる。</p> <p>◇「新しい東北」事例集から、まちのにぎわいや人々の結び付きを取り戻すために、人々はどのような活動をしているか読み取っている。(スライド)</p> <p>◇人々の結び付きを生み出すために必要なものは何か考察し、スライドにまとめている。(スライド)</p>
<p>まとめ 5分</p>	<p>○振り返りシートを記入する。</p>	<p>○本時の学習内容を振り返り、次時への見通しをもたせる。記入が終わった生徒からスライドの作成、修正を進めさせる。</p>

(3) 生徒配布資料（本時の展開にある①～⑥の事例について提示するもの）

① 「せんだい・みやぎネットワーク」子どもの居場所づくり

# 町中に子どもたちの声があふれる。“遊び”がつなく地域の絆



<舞台>  
宮城県仙台市・岩沼市



東日本大震災で、子どもたちが外で遊ぶ場所を失い、さらに仮設住宅などでは住民同士のつながりも薄れてしまいました。このような状況で、地域全体で子どもたちを見守り、みんなで支え合う仕組みを取り戻すことが大きな課題でした。

そこで、「冒険あそび場-せんだい・みやぎネットワーク」という団体が活動を始めました。彼らは、カラフルな車「プレーカー」に遊び道具を積んで、小学校や仮設住宅などを巡回。スタッフはかなづちやロープといった「遊びの材料」だけを用意し、子どもたちはビニール袋を尻に見立てるなど、自由に想像力を働かせて遊びを創り出しています。

同時に、大人向けの「緑側倶楽部（えんがわくらぶ）」も開かれ、小物づくりなどを通じて親世代やお年寄りも交流を深めています。この活動のおかげで、子どもたちの無邪気な笑顔が戻り、心のケアにもつながっているのです。また、多世代の人々が交流し、地域全体で子どもたちを見守る温かい風景が戻ってきました。

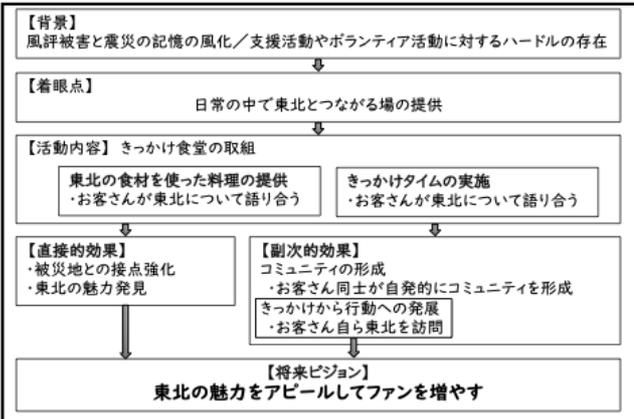
「新しい東北」先導モデル事例集vol.2 P15～16  
[https://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat1/sub-cat1-11/newtohoku\\_jirei2\\_katamen.pdf](https://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat1/sub-cat1-11/newtohoku_jirei2_katamen.pdf)

② 「きっかけ食堂」食を通して東北とのつながりづくり

# 「食」を通して東北とのつながりを生む 京都発、毎月11日に開催する「きっかけ食堂」



京都市  
東京都渋谷区  
宮城県仙台市 など



東北に行かなくても東北のお酒や料理を通じて東北や震災について考える「きっかけ」を作りたいと、立命館大学（京都府）の学生たちが始めた取組です。

東北の生産者から直接仕入れた食材を使った料理やお酒などを提供し、お客さんと交流します。毎回20時11分に設けられる「きっかけタイム」では、「話したいこと」「東北・熊本で理想すること」を書き込んだカードによって、お客さんとスタッフや他のお客さんとの間で会話が弾みます。

京都だけでなく、東京や仙台などで毎月11日に開催されており、「きっかけ食堂」での出会いをきっかけに現地を訪れる人もいます。

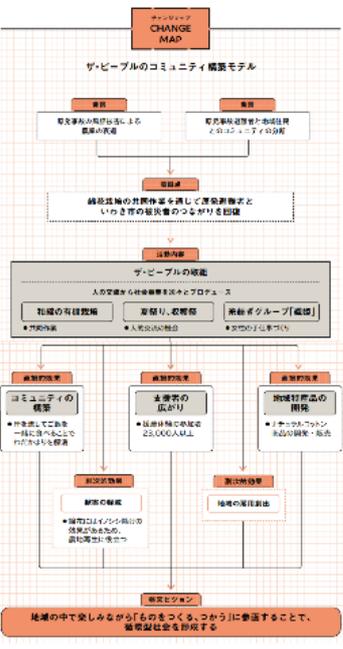
「新しい東北」事例集～地域課題解決に向けた挑戦～  
 平成29年度『新しい東北』復興・創生顕彰受賞者の取組 (p.42～45)  
 NPO法人きっかけ食堂

③ 「NPO 法人ザ・ピープル」 オーガニックコットン栽培で地域コミュニティの再構築

# オーガニックコットンの栽培で分断された地域コミュニティを結び直す



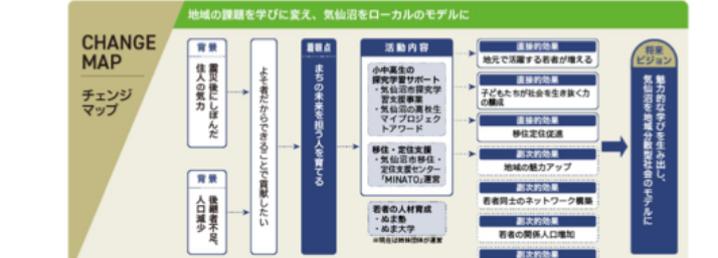
【資料の概要：震災後の「もやい直し」と人々のつながり】  
 東日本大震災と福島第一原発事故に見舞われた福島県いわき市は放射線への不安や農産物への風評被害によって農業衰退という課題を抱えました。さらに深刻だったのは、津波の被災者や地域住民、原発事故により急増した避難者（2011年約4万人）との間で、コミュニティの分断が生じたことです。人々は互いに疑心暗鬼になり、それぞれの思いがすれ違う状況になりました。  
 この困難な状況を前に、NPO法人ザ・ピープルは、傷ついたコミュニティの絆を「結び直す」ことの重要性に注目しました。この活動は、水俣市で使われている、傷ついた絆を再構築する意味を持つ「もやい直し」という言葉からヒントを得ています。そして、「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」が開始しました。コットンの栽培は放射線に対する不安が比較的少なく、また、イノシシ除けにもなるため農地再生に役立つという特徴がありました。  
 このプロジェクトの核心は、**オーガニックコットンの栽培と商品開発を通じた共同作業の場づくり**です。当初会話が弾みにくかった住民たちも、畑で「一緒に泥だらけに汗を流し、みんなでごはんを食べる」という共同作業を通じて、立場や違いを越えて打ち解け、**わだかまりを解消**していきました。これにより、地域コミュニティの絆を結び直すことが目指されました。  
 このプロジェクトは原発周辺地域にも拡大し、**持続可能な事業モデル**となっています。全国から延べ2万3000人以上のボランティアや、多くの企業と連携し、商品開発と販売を行う組合を設立し、販売収益も軌道に乗り始め、地域の雇用創出や新たな産業の可能性を生み出しています。この取り組みは、震災復興の目標である「誰も置き去りにしない」まちづくりを体現しており、**災害からの立ち直りには、人々が交流し、協力し合う「人とのつながり（コミュニティの結び直し）」が不可欠**であることを示しています。



H29年度事例 [https://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat1/sub-cat1-11/20221000\\_h30atarashitohokujireisyuu..pdf](https://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat1/sub-cat1-11/20221000_h30atarashitohokujireisyuu..pdf)

④ 「一般社団法人まるオフィス」地域課題探究で若者の人材育成

# 地域の課題を学びに変え、気仙沼をローカルのモデルに



**<舞台>**  
 宮城県仙台市・気仙沼市

都内のベンチャー企業に入社する直前だった加藤拓馬さんは、東日本大震災の被害を聞いて、「東京で働いている場合じゃない。俺が行かない」との思いでボランティアへ。がれき撤去や避難所支援を続ける中で、「よそ者だからこそ、もう少しできることがあるんじゃないか」と考えた。  
 震災復興から**まちづくり**に視点を移した加藤さんは、唐桑の漁師暮らしの体験ツアーを企画する中で、まちの未来を担う人を育てることの大切さに注目していく。  
 一般社団法人まるオフィスを設立し、加藤さんが目指すのは、「**地元の課題を学びに変える**」こと。それには「地元の子どもや若者がまちでの学びを面白がる」とこと、「面白い大人が外部から流入し続ける」ことが必要だ。  
 地元小中学校の探究学習サポートや若者の人材育成「めま塾」を展開し、気仙沼市移住・定住支援の「MINATO」運営を通して、それらを成し遂げようとしている。  
 その取組は、地元で活躍する若者を増やし、移住・定住の促進の効果を生んでいる。

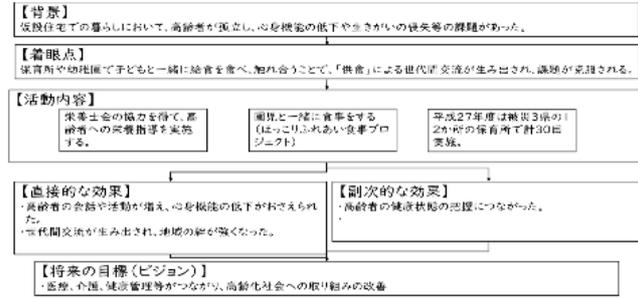
令和3年度「新しい東北」復興・創生の星顕彰 “一般社団法人まるオフィス” <https://www.newtohoku.org/kenshou/cases/06/index.html>

⑤ 「日本栄養士会」 保育所を活用した、生活不活病の防止

# 保育所を活用した生活不活発病防止の取り組み



<舞台>  
岩手県 野田村

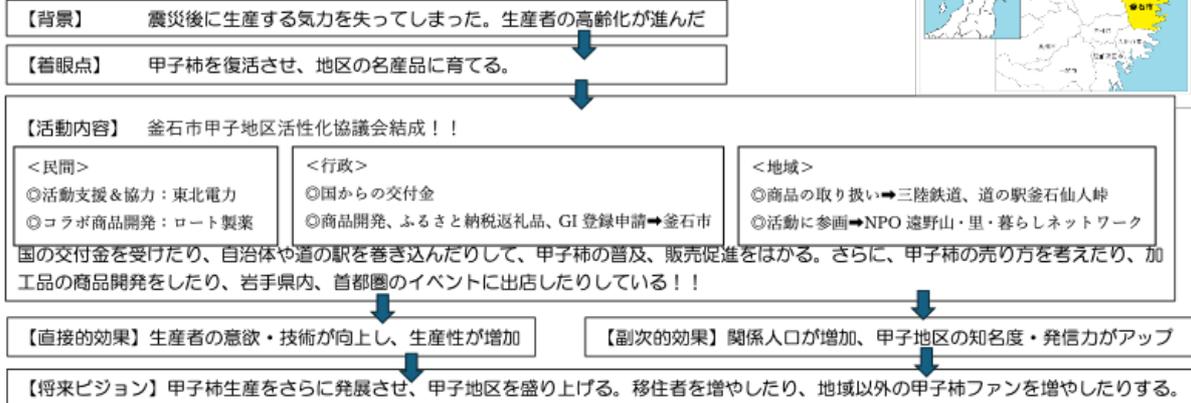


《保育所を活用した生活不活発病防止の取組》（ほっこりふれあい食事プロジェクト）仮設住宅の高齢者が保育所・幼稚園で子どもと一緒に給食を食べ、ふれあうことにより、孤食の解消や、生活の不活発化を原因とする心身機能の低下等の課題に対応するとともに、高齢者の生きがいを創出する取組。日本栄養士会及び被災3県の栄養士会の協力を得て実施しており、都道府県栄養士会が運営する 地域住民のための食生活支援活動拠点（栄養ケア・ステーション）の管理栄養士等が、高齢者への栄養指導等を実施している。平成26年度当初は栄養士が作った栄養バランスを考えたお弁当を保育所等に受け取りに来てもらうことを予定していたが、保育所等から「園児と一緒に食事をしてはどうか」と提案があり、イベントの際に保育所等で子どもと一緒に給食を食べる方式で「ほっこりふれあい食事プロジェクト」を行った。高齢者の外出の機会の提供だけでなく、園児や保育士と一緒に食事や会話を楽しむ「供食」により世代間交流を生み出し、地域社会のつながりを築く活動となっている。平成27年度においては、実施拠点数を増やすとともに、イベントの際だけでなく平時においても事業を実施。平成27年度は、被災3県の12か所の保育所等で、事業を計30回実施した（延べ393名参加）

「新しい東北」の創造に向けた取り組み  
[https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/zenbun/pdf/1s3s\\_7.pdf](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/zenbun/pdf/1s3s_7.pdf)

⑥ 「甲子柿を守る会」 柿を地域の名産品にする

## 生産者低迷の名産・甲子柿を復活させる！！



岩手県釜石市甲子地区の特産品である甲子柿は、小枝柿という渋柿を1週間燻煙して脱渋する独特の製法で生まれる柿です。果肉はゼリーのような食感と強い甘みが特徴で、ぼつりと赤く輝きます。震災後、生産者の高齢化や震災疲れで生産が低迷しましたが、「甲子柿を守る会」や「釜石市甲子地区活性化協議会」が復活に取り組みました。彼らは「まちづくり元氣塾」の勉強会を通じて生産者の意欲と技術を向上させ、柿ドレッシングやレアチーズケーキなどの加工品、および急速冷凍技術を開発することで、日持ちが短く輸送に不向きという課題を克服し、通年販売を可能にしました。また、国の交付金や東北電力、ロート製菓など多岐にわたる連携・協働を通じて支援を受け、GI（特定の地域を生産地とし、その土地の気候や風土などと結びつけた品質や歴史をもつ商品の名称を登録する制度）登録も達成し、首都圏での知名度も高めています。地域外の若者も甲子柿の魅力に惹かれ、地域活性化の重要な要素となっています。例えば、「甲子柿が好き。甲子の皆さんが孫みたいにかわいがってくださって、この地域も大好き」と、県外から地域おこし協力隊として活動し、終了後も保育士として釜石に住む人がいるなど、「甲子」ファンの参画が復活に寄与している。

出典  
『新しい東北』事例集 地域課題解決に向けた挑戦 令和2年度 Ver  
[https://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat1/sub-cat1-11/20221000\\_r3atarashiitohokujireisyuu.pdf](https://www.reconstruction.go.jp/topics/main-cat1/sub-cat1-11/20221000_r3atarashiitohokujireisyuu.pdf)



## 7 思考の構造図



※アルファベット大文字A B C…事実に認識の第2段階：個別的・説明的な段階  
 小文字a b c…事実に認識の第1段階：個々の事実の記述の段階

### (3) 参考文献

- 五十嵐敬喜ほか「震災復興10年の総点検 創造的復興に向けて」岩波書店  
公益財団法人日本地理学会編「地理学事典」丸善出版  
国立教育政策研究所「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料」  
白井俊「OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来」ミネルヴァ書房  
宗實直樹「社会科『個別最適な学び』授業デザイン理論編」明治図書  
藻谷浩介ほか「里山資本主義 日本経済は安心の原理で動く」角川新書  
文部科学省「中学校学習指導要領 社会編」  
山下祐介ほか「被災者発の復興論 3・11以降の当事者排除を超えて」岩波書店  
渡部竜也・井手口泰典「社会科授業づくりの理論と方法」明治図書